



まいDO!

第86回自治労定期大会大阪実行委員会

〒530-0041 大阪市北区天神橋3-9-7 PLP会館1F

●Tel 06-6242-2233 ●Fax 06-6242-2230

自治労大阪大会ニュース

2号 2013年5月1日発行

p.1

会場への遊歩道に出店

東日本大震災復興応援市 「大阪ふるさと市場」も同時開催

甚大な被害をもたらした東日本大震災、福島第一原発事故から2年以上が経過しました。現地では復興に向けて自治労組合員と住民の皆さんの懸命の努力が重ねられています。

そんな活動を少しでも応援できたら…。その思いから、大会会場「大阪城ホール」から最寄り駅JR「大阪城公園」駅までの遊歩道に「東日本大

震災復興応援市」を出店します。福島・宮城・岩手の各県本部のご協力の下、被災地域のJAや物産振興協会とタイアップして、おいしく安全な果物や水産加工品をお届けします。大阪のおみやげに東北物産を!! これもひとつの大阪らしさです。

もちろん「大阪の味」も満喫いただけるように、大阪ふるさと暮らし情報センターによる「大阪ふるさと市場」や府内各単組、友誼団体からも「味」をお届けします。

大会への行き帰りやお昼休みのひととき、ぜひ、お立ち寄りください。

元気はつらつ単組めぐり……八尾現労 「パッカーくんをたすけるぞ」

全国から見ると、大阪＝ガラが悪いというイメージが強いようだが、ご紹介する八尾市現業労働組合（通称＝八尾現《ヤオゲン》）は、大阪の中でもとくにガラが悪いとされている河内地方の真ん中に位置する八尾市の清掃労働者だ。だからといって八尾現の仲間が「ガラが悪い」ということではない。

八尾現は、はやくから分別収集の課題に取り組み、地域住民にも分別方法を自らが積極的に説明するなど啓発活動を行ってきた。今回紹介するのはそのなかでも、八尾市優良職員表彰を受賞した環境絵本「パッカーくんをたすけるぞ」だ。この絵本は、年齢を問わず誰もが環境問題に関心を持つきっかけとなる本として作られたもの。地域のガレージセールやローカルFM局などでア

ピールするなどして、マスコミにも大きく取り上げられてきた。



現在、八尾市では八尾現からの政策提起などから種分別収集が行われている。この「パッカーくんをたすけるぞ」も現状に合わせて改定が検討されている。

彼らの熱意からは単に作業を進める作業員ではなく、一般廃棄物処理に携わるスペシャリストとしての意識と仕事に対する誇りが見える。

しかしやっぱり「ガラ」は少し悪いか…。

ほんまかいさ 大阪

旧第一毛馬閘門は、新淀川の開削を含む淀川改修工事に伴いできた施設だ。新淀川から旧淀川（大川）へと分岐する場所に設置され、水量を調整する「毛馬洗堰」とともに1907（明治40）

年8月に完成した。「閘門」とは水位の違う川を行き交う船のための施設で、ドッグ状の施設に船を引き入れてそこで水位を変更し通行させるというもの。船運が欠かせなかった当時、水位が違っていた新淀川と大川にはなくてはならない施設だった。その後、第二閘門が1918年

に、現在使用されている閘門が1974年に作られた。旧第一、第

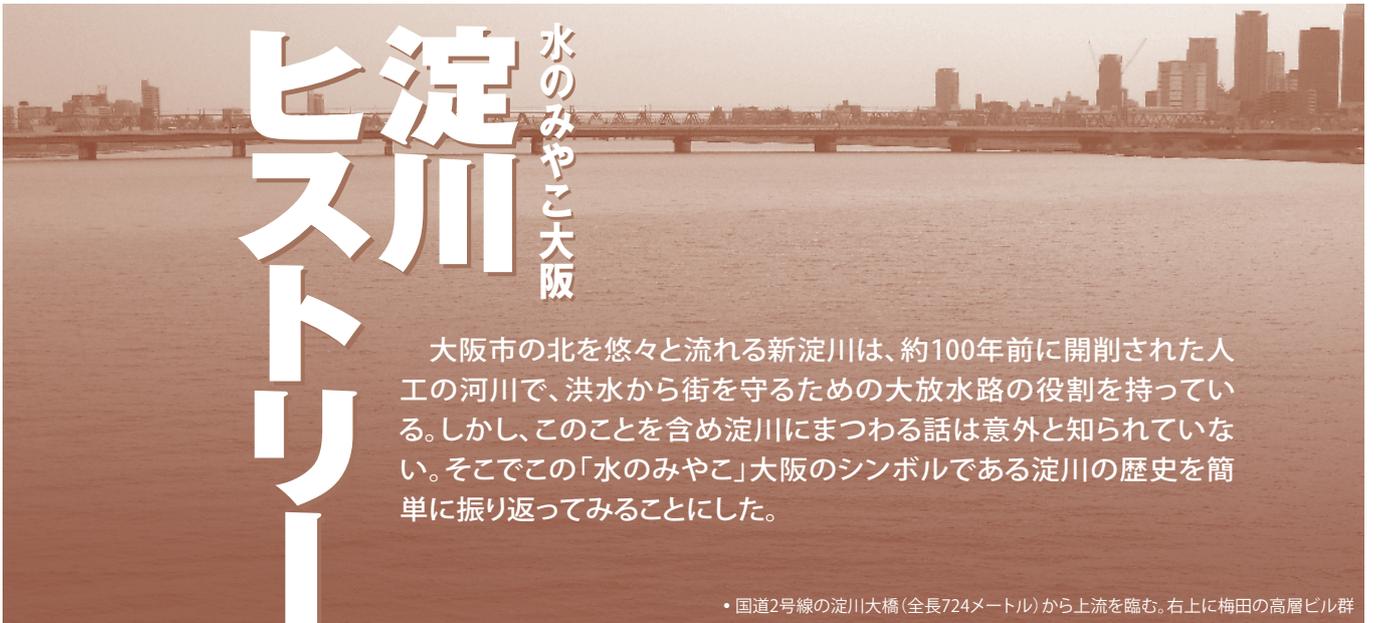


二閘門とも1976年にその本来の役割を終えている。そして、旧第一閘門は産業遺産として淀川

菟門様よいえらい毛馬の閘門

河川公園に保存され、2008年には旧毛馬洗堰とともに国の重要文化財に指定された。また第二閘門は船だまりとして今も使用され続けている。

水位の高低を調節するドッグに入る船（「毛馬閘門」大阪名勝絵葉書より）



淀川 ヒストリー

水のみやこ大阪

大阪市の北を悠々と流れる新淀川は、約100年前に開削された人工の河川で、洪水から街を守るための大放水路の役割を持っている。しかし、このことを含め淀川にまつわる話は意外と知られていない。そこでこの「水のみやこ」大阪のシンボルである淀川の歴史を簡単に振り返ってみることにした。

・国道2号線の淀川大橋(全長724メートル)から上流を臨む。右上に梅田の高層ビル群

近世の淀川、その恩恵と水難の歴史

淀川は古くから京と大阪を結び、人や物を運ぶ大動脈としての役割を担ってきた。奈良・平安時代には都から遣唐使を乗せた船が通行し、江戸時代には三十石船や各種の川船が往来、明治時代になると蒸気で運行する外輪船が登場するなど交通・物流の基盤であった。

そして大阪を筆頭に流域の村や町は大動脈・淀川の恵みで栄え、日本の政治や経済、文化の中心として発展する道を歩むこととなった。しかし、それは同時に豪雨などによって引き起こされる洪水との闘いの道でもあったという。

その闘いの歴史は、宇治川や大和川の付け替え、堤の設置、安治川の



川のようになった道路に災害救助隊の舟。1961(昭和36)年の第2室戸台風で被害を受けた西淀川区の光景(写真一産新聞社「昭和の大阪」より)

開削と、それぞれの時代に施された大規模な治水対策の痕跡からうかが



●淀川改修下流部比較法線入平面図。写真ではわかりにくいですが、開削する放水路として第1案から4案までのラインが記入されている。(「大阪人」より)

がい知ることができる。だが、そんな人々の努力の積み重ねがあっても水害の脅威は一向になくならなかつ

大阪の流れを刻む二つの「淀川」

新淀川の誕生で、それまで大阪市の中心部を経て大阪湾へと流れていた旧淀川は「大川」と名前を変え支流となった。そして新淀川では、改修工事で生まれた「わんど」が天然記念物のイタセンパラをはじめとした川の生き物たちの命を育み、河口付近ではシジミやウナギを求めての漁が続いている。

暴れ川から自然と人が共存できる川へと大きく変ぼうを遂げた淀川。現在、市内を流れる大川では川に沿って桜の木が植えられ、水上バスや観光船が行き交っている。そして

た。そして1885(明治18)年夏、長雨で淀川の堤防が次々と決壊し大阪府の大半が浸水、都市機能を停止させるほどの大水害がとなった。これがきっかけとなり淀川の大規模改修事業が始まったのだ。

新淀川はその事業の一環として開削された巨大放水路だ。1909(明治42)年6月に工事が完了し、大阪の治水安全度は飛躍的に向上した。だが、この開削に伴い^{さるむら}申村(現此花区伝法5丁目)の9割は水没、住民たちは長年住み慣れた土地を離れることを余儀なくされた。そんな人々の悲哀の上に誕生したのが新淀川である。そんなことも心に刻んでおきたい。

新淀川の広い河川敷は公園やスポーツ広場に整備され、市民の憩いの場



わんど―淀川の航路を保つ目的で設置された構造物に土砂がたまり形成されたもの。川の本流とつながっている小さな池のような場所。

となった。
治水から利水、そして親水へ。
「水のみやこ」大阪の歴史は淀川とともにあった。